

まえがき

会津藩士として戊辰戦争で進撃隊を率い、最初の屯田兵として琴似（現・札幌市西区）に入植した三澤毅氏（一八四四～一八九一）は、「諸扣帳」と題した自筆の文書を残しました。琴似兵村の自宅で病氣療養中だった明治二十二（一八八九）年十一月十七日から翌二十三（一八九〇）年十二月三十一日までの四百十日間の日々の出来事を二つ折りの半紙に一日も欠かさず、毛筆で書き記したものです。天候や来訪者、金銭の支払いなどを「覚え書き」的な記録であると同時に、見聞したことに感想を添えた「随想録」の一面も見えます。

その記述からは、空模様をうかがいながら畑を耕し、時に新聞や書を読み、人々と酒を酌み交わしながら歓談する日常の暮らしと、四季折々の行事や冠婚葬祭の親交の様など兵村の風景が浮かび上がってきます。また、一生活者の視点から見た北海道開拓の歴史の断面や、当時の社会経済の姿も読み取ることができ、極めて貴重な史料といえます。

三澤氏は明治十（一八七七）年、軍曹として西南戦争に出征し、凱旋後に少尉、中尉と昇格。明治二十（一八八七）年に大尉を拝命し、第一大隊第三中隊（新琴似）の初代中隊長、屯田監獄長を務めました。この間に、出兵記録や屯田兵召募の出張記録、用地測量の調査記録などを五分冊の日記形式で残しています。「三澤日記」と呼ばれるこれらの史料に対して、「諸扣帳」は、身辺雑事を綴った私的な記録ではありますが、多くは「昔語り」の世界にあった屯田兵村の姿を「実記」とし

てリアルに伝えている点に大きな特徴があります。

特に、「諸扣帳」には、親戚、知人、近隣の人々の頻繁な出入りと、それに伴う贈答品などの記述が多数含まれています。集団作業や冠婚葬祭を取り仕切る「契約会」や、繁忙期に互いに人手を出し合う「手間返し」などの実態にも触れられており、兵村を基盤とした隣保扶助のしくみが機能していたことが分かります。

「諸扣帳」の記述の正確性については、近年、大きな注目を浴びる出来事がありました。明治二十三年に新琴似兵村（現・札幌市北区）で起きた中隊本部銃撃事件の発生日は、長らく「十月八日」が通説とされてきました。ところが、「諸扣帳」の記述の解析から「八月十八日夜」であった可能性が高まり、国立公文書館が公開した軍事裁判記録がこれを裏付けたのです。また、四季を一巡しての詳細な営農記録からは、明治中期に北海道農法の原型が成立していたことがうかがえるなど、その後の農業の発展の歴史を考察する上でも、貴重な史料といえます。

「諸扣帳」全文の復刻・出版については、原本を継承所蔵された三代目・三澤勝彦氏よりご許可いただき、平成二十八、二十九年に北海道屯田倶楽部が刊行した会報・研究誌『屯田』（第60～62号）に連載収録いたしました。本書では、本文下段のメモ欄の補足説明を加筆するとともに、兵村の生活文化、農事、軍事についての考察・解説、三澤毅氏の人物記を加えました。

令和四年初夏